

四月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

あべとへ

狩野 一 男 東京

雪の降る村育ちだがさびしかなし聖なる雪を我は知らずも

サント・ネージュ

「片仮名」にしようフクシマアオモリもアキタヤマガタイワテミヤギも
卵かけごはんに疲れ今朝のこと納豆ごはんにして噎せにけり

寒々と老人ロード横たはりスピード感をもつて猫過ぐ

「出鱈目」は宮城弁だが、あらまづや現政権にとんぴしやりだなあ

空の鈴の音

小 島 ゆかり 東京

七草を言へぬ娘が作りたるとはいへうまし七草の粥

冷えわたる夜の澄みわたるかなたよりもうすく天の雪麻呂が来る

しろまゆ たれまゆ
白眉の垂眉のよき翁顔たまゆら浮かび夜の雪くる

雪麻呂を待ちつつこよひあかあかとわれは椿の媼となりぬ
はしたか
鶴のあしに結はれし鈴の音をはるかにしまふ空の千年

富岡町夜の森

田 宮 朋 子 新潟

大津波おそひしままの漁協ビル放射能汚染区域に残る

新春の青天の下くろぐろとフレコンバッグ積まれてゐたり

駐停車できぬ国道6号線無人の教会、寺見えて消ゆ

つぼみもつ枝々あふぎ(夜の森)の桜並木の下にたたずむ

すぐそこは帰還困難区域にて進入禁止のバリケード立つ

0歳児

松 尾 祥 子 東京

熟したる庄内柿を啜るとき口から鳥になりゆくわれら

折れた枝テープで巻きし梅の木がつぼみつけたり陸月の庭に

スプーンをむんずと掴み五ヶ月の子ははじめてのお粥たひらぐ

0歳児あやして歌ふ九十歳こゑに張りあり力遷るや

背に鍼を打たれ串焼き思ひをり頑張り過ぎを叱られながら

☆

☆



高野 公彦 千葉

空にゐる雲とは空に浮かぶ(水)その輝きの下に草萌ゆ
日本の二都市の被爆　そしてまた歳月を経て一県被曝
食ふ人無き極彩色の海牛を老いて哀れと思ふことあり
冥より冥に至るひとすぢの道あり歌を詠みつつ行かな
精神の眠れる夜もはたらきて命を支ふ五臓六腑は

水島 晴子 兵庫

仲 宗角 三重

身じろぎのやまぬ蕾をうちにして水仙の苞あをく張りゆく
薄ぎぬの苞葉裂けて水仙の咲かんとつどふ蕾見えをり
赤ままでの穂にはじまりて続きこしわが炊ぎごと今を絶え絶え
補聴器をつけて知りたりこの人の関東ことばこゑ明るきを
中腹に家並つづく山は見え越えてゆきたし彼方の界に

杜 沢 光一郎 埼玉

奥 村 晃 作* 東京

葉を落とし終へたる太き菩提樹のこずゑサンゼンと天にかがやく
菩提樹の象に似る幹なでさすり無上正遍なる境地をおもふ
大木のもとに小木育つといふ言葉おもひつつ菩提樹あふぐ
地に敷ける網さながらに菩提樹の樹影はわれをつつみさゆらく
喬木の冬木このもし乾きたる風にかふかふとこずゑ響り合ふ

武 田 弘之 神奈川

森 重 香代子 山口

師の里の米購ひてのひらに掬へば光るまはゆきままでに
等級は下がりたれども魚沼産こしひかり旨し師の里の米
賀状なる「即詠五首」に驚嘆す今年の歌がもうできてゐる
定年となりしより日々加速して時が私を追ひ越してゆく
痛む足こらへて来たる歌会なり言葉飾らず歌を語らん

考えに考え抜ける八段の上手に負けた石九置いて
眠るにも体力要るとそう言えば赤ちゃんは昼夜眠つてばかり
白鷺は体大きく白いから池の面遠くくつきりと見ゆ
野良猫に水やり餌やるいくたりに生かされている野良猫いくつ
「鼓動」とのコラボ存分にしたかった玉三郎のこころ付度す
もの音の絶えずしてをり誰も居ぬ明るき部屋に本読みをれば
家老ゆるさびしき音ぞ独り居る耳に軋みて時折響れり
耳聴くひとり住みをり聴き覚えなきもの音にやすく怯えて
昼ひとり布団を被り隠ろへり虫のごとくに怯えてわれは
雨の日のコーヒーハウスの片隅にもうながく居る 夫よ



桑原正紀 東京

八十三の誕生日まで七曜を残して逝けりふるさとの兄
死に化粧といふは酷なりつやつやと生き生きと死を許さぬごとく
死に顔といへども髪膚まとふ顔のぞきて終のお別れを言ふ
炬を出でし兄はや既に兄ならで兄の形のしらはねの高
箸をもて兄を拾ふといふことのせつなかりしよひそけき音に

宮里信輝 神奈川

ひと夏を生きて消えたるひとついのち玉虫色のむくるをのこす
目つむれば俄然めぐりのモノの音、気配聞きたすふたつ耳茸
何十億光年過去をのぞくなり公園すみの椅子に仰臥し
針穴に糸を通すと見た世界そこには壮き父、母がゐた
年々にガソリンスタンド消えゆけり増えてゐるなりリサイクル店

岡崎康行 新潟

少年のわれに（東京）を持ち来たるあのころの叔母まだ若かりき
白鳥の浮かべる潟にともに浮く小さき鴨の数かぎりなし
入ると直ぐ電灯が点きて浮かびたり公園の中のトイレの内部
狭き庭に納まるやうにはぐくみて実をたのしみし梅の木も切る
瘦せぎすで肩幅広き体型を衣紋掛け使ふときに思はる

木畑紀子 京都

血圧の乱高下する寒の日々こころの起伏を昇り降りして
枯れ芝に養生中の札を立てロープ張るがに冬ごもりせり
首体操、腕体操に数を読みこころを整へゐたり聖夜を
くすり二種サプリー三種をあさあさに飲んで平常心を呼ぶべし
早々と寢床に入りて読みかけの本「おもかげ」の背文字見てをり

日影康子 富山

雪しぐれに天幕テントの並ぶ歳の市かへらぬふる里をテレビに見つむ
氣象図の線ぎつしりと縦ならびに年末寒波が北陸を攻む
元日の暁暗の空のひとつ星清きやにまたたくよき年なれよ

三年日記の最後の年とつしみて元日の項をまづ書き入るる
無表情の夫の車椅子押して巡る正月気分のだだよ病院

古屋祥子 群馬

掬わきてなる検査を勧められてをり認知症が進んでゐるのかどうか
眠り姫ひめならぬ媪おばあの眠りにて一寸醒めては眠りふたたび
これの世に「確かに私が存在した」証すは過去形の歌集の五冊
讃辞よりダイヤよりなほうれしきは夫に貰へる「自由の時間」
日野原先生百五歳の生を終へ給ふ、まだわれに残るは十余年さき

影山一男 千葉

草サッカー草野球せしコスモスの青年歌人らみな老いにけり
去年今年われを悩ますをとこゐて初めてぞ買ふ魔除けの札を
また一人ゆゑなくわれを責むる者現はれて立ち暗みする日々
憤死とふ言葉を思ふ強欲なをとこ、無礼なをとこの顔に
守り猫柘榴が死にてより二年良き事の少 悪しき事得多

島田 暉 神奈川

青空を内ポケットに秘めもてり老いしといへどなほし生きたく
ポケットにいつもしまひてゐし星が逃げてゆくなりわれ夢太郎
女子校生お尻の笑顔ふりまきて校門狭しとかぐや姫出づ
横浜の白き波の穂跳むれどあしたの吾が身浦島太郎
星の空ながく見上げて吸はれゆく吾は誰にもまつろはぬ鬼

大松 達 知* 東京

酒のことお酒と呼んでいた夜々の父の疚しさわかる気がする
このごろは消化ししやすい餌ばかり食つて第一の胃の壁がうすい
カタカナで書いてしまえばなくなりぬ君の名前のなかのGの音
初恋でないけどずっと好きだった人が四十八でうつくし
食欲をととのえながら暮れまされ白と呼ばれるものを飲みおり

津 金 規 雄 神奈川

今年また遭ふ臘梅か来たるべき季節のまへの黄の福音
枯山を背景として飛ぶときに鳶はうしなふその翼形を
蒼穹の奥より翔けり来たるもの冬野に降りて墓標となれり
窓からの目白の歌も招き入れ聴く「田園」の緩徐楽章
目つむれば視野いづばいの白磁の皿そこに置くべき何ものもなし

小山 富紀子 京都

抱きこち良き一升びん銘「呉春」除夜の鐘聞く連れに良きかな
画師呉春そ様が聞きし除夜の鐘如何に鳴りしか天明の空に
うま酒に味覚嗅覚よろこべば聴覚は祝ぐ除夜の鐘の音
春用意終へてほつこり家刀自の心をほぐす百八つの鐘
除夜の鐘聞こえぬといふ母の手をひきて戸外に出でしあの年

清 水 正 子 神奈川

酔ひどれが路上寝してゐる暮れの街われはポトフを食べてぬくぬく
「ポアンカレ予想」ぢやなくて(ポアンカレ)予想に反しける味かも
ヒトわれの血液型と同じらしいゴリラはなぜかみんなB型
イギリスに踊るゴリラがあるとといふバレエのポーズする変なやつ
鬱の日は雲になりたい自分がために御薄たつぷり泡だつてゐる

小 嶋 一 郎 佐 賀

背を伸ばせ足を交はせといふ声すわれにはなく後ろの老いに
置き忘れひとつだにせず子ら去りて正月三日夜は更けゆく
緑内障いよよきはまる老い妻か爪剪りそこね悲鳴あげたり
癌で死ぬくたりに述べて謝辞とせり妻を亡くし喪主たる友は
太陽が八分まへに放ちたるひかり掌に受くいただくさまに

後 藤 美 子 北海道

新しきタオルおろして顔を洗ふ今日より始まる一年のため
沈丁花ほのほの匂ひクレマチス壺花ひらき歳旦しづか
「今しばし生きなむと思ふ」皇后の言の葉寂か胸底に沁む
身の廻り手しまひしつづ残る日を重ねゆかむか平成が終る
(粥柱)小さく切りたる餅を入れ小豆粥煮る終日ぶき





福士りか 青森

焼酎の力は借りぬオレはオレで熟してやると青柿言へり

メデューサの息子が母に「うるせえ」と言つてしまつてしばし固まる
骨のない鮭の切り身が給食に出されるといふ 骨のない鮭
切り身からいつぱんいつぱん骨を抜き成形せし鮭アジアから来る
骨のないサケ、背の歪むアジ、被曝せしマグロ太古の海にはをらず

藤野 早苗 福岡

コンピニのスムージー容器に極太のストローぶすり dark side of me。
すこやかなひと日のための護符として青虫風味のスムージー飲む
青虫つてこんな味かも 思ひつつ飲むスムージー身体にわろし
尺八を吹く人の顔してをらんグリーンスムージー飲むわたくしは
○シコウのためなら死ねる「シ」の時代はるかに今は「ケ」の字を入れん

風間 博夫 千葉

パーの手で目覚めずグーの手で目覚む今朝もかたくなに握るグーの手
残りたる水ガリリと噛みくだき黒霧島の勘定締める
「しすせそ」に灯りともりぬ西日暮里駅すぐ讃岐うどん屋「しすせそ」
「行ってきます」わが言へば「行ってらっしゃい」の妻の声背を軽やかに押す
「ただいま」の子の声を聞く二十二年時廊下の明かりともし「おかえり」

田中 愛子 埼玉

声ひくく読みたる後に末吉のみくじを細き枝にむすびぬ
恐竜がさいごに見たる冥さなど思ひて見上ぐ冬のゆふぞら
フェルメールのトートバッグのうれしくて何か大きな物を買ひたし
ふゆぞらに大風あがり父のない子どもやがて父に似てゆく
煙草ふかし未婚女性をからかひて昭和のドラマゆつたり進む

橘 芳園 新潟

中東の子らの犠牲死むごくしてみそなはずとふ仏疑ふ
見たる人一人あらぬをよきことに見たるがごとく仏を刻む
見つつめてこころ快樂におびかるるかすかに笑みをたたへる仏
一切衆生悉有仏性おたがひを拝まず木造の仏を拝む
木の仏拝めるわれをたかだかと花をかかげし猪独活笑ふ

水上 比呂美 東京

天照大御神の代の太陽が極月尽の空にありけり
愛媛より調布へ来たるオレンジの名は愛しきやし「紅まどんな」といふ
甘橘類（紅まどんな）の実の色は麗人の豊頬のいろ
天皇となられる浩宮様も召されたらうか（紅まどんな）を
おのおの果実に点るちさき灯がひとつとなりて瀬戸の夕つ陽

鈴木 竹志 愛知

大関が、横綱が負け横綱が引退しました横綱休場す
本当に負けつぷり良き横綱と言ふほかはなし稀勢の里よ 噫
枝々に止まり燥げる小鳥らの一生思ふ長さやいなや
本物かどうか怪しき植物のあればやむなく手で触れてみる
パソコンやスマホで流す情報は見えない誰かに吸ひ取られゆく

原賀 環子 東京

大みそかの夕べ切れたる電球の障りのやうに新年を病む
新玉にして荒玉の年あらむ平成三十一年のわれ

キッチンの中のシンクの乾く明け暮れをさびしみながら蒲鋒を切る
羽根おほき受胎告知の大使がぼんやりと踵つ春の賀状に
十二歳だつたのだらう有卦の年、有卦といふ語を父にならひき

水上 芙季 東京

年末の湯船で船を漕いでをりお湯がだんだん水になりゆく
昼寝する父を時々見つつ書く年賀状もうナ行まできた

一月四日出勤組は御神籤を静かな職場で見せ合つてゐる
水上さんにとつて癒し系つて誰なの？と聞かれる 誰にも癒されてない
福砂屋のキューブカステラ食むときに金の小さな幸せがくる

大野 英子 福岡

元日の市民球場だれもあらず一機重たく曇天をゆく
日蝕を捉へた視線に残りをりまるく黄色いひかりの欠片
さつきより少しひかりが暖かな気がする蝕を終へた太陽
月蝕もひとり眺めた川べりで膝を抱へてビールを飲んで
あのとときの私を視線はつかまへる背中をそつと撫でてあげたし



高野公彦著 平成30年11月刊 各巻二八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

明月記を読む コスモス叢書第一一四八篇 短歌研究社

—定家の歌とともに— 上下

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二-1-21 五〇六

奥村晃作歌集 平成31年2月刊 一四〇〇円(税別) 送料三〇〇円

八十一の春 コスモス叢書第一一五〇篇 (株)文芸社

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七-1-51 一六

小島ゆかり歌集 平成30年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

六六魚 コスモス叢書第一一四三篇 本阿弥書店

著者住所 〒188-0001 東京都西東京市谷戸町二-18-27 一九一四

古屋祥子歌集 平成30年11月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

地上根 コスモス叢書第一一四二篇 柘書房

著者住所 〒371-0116 群馬県前橋市富士見町原之郷一-1-24